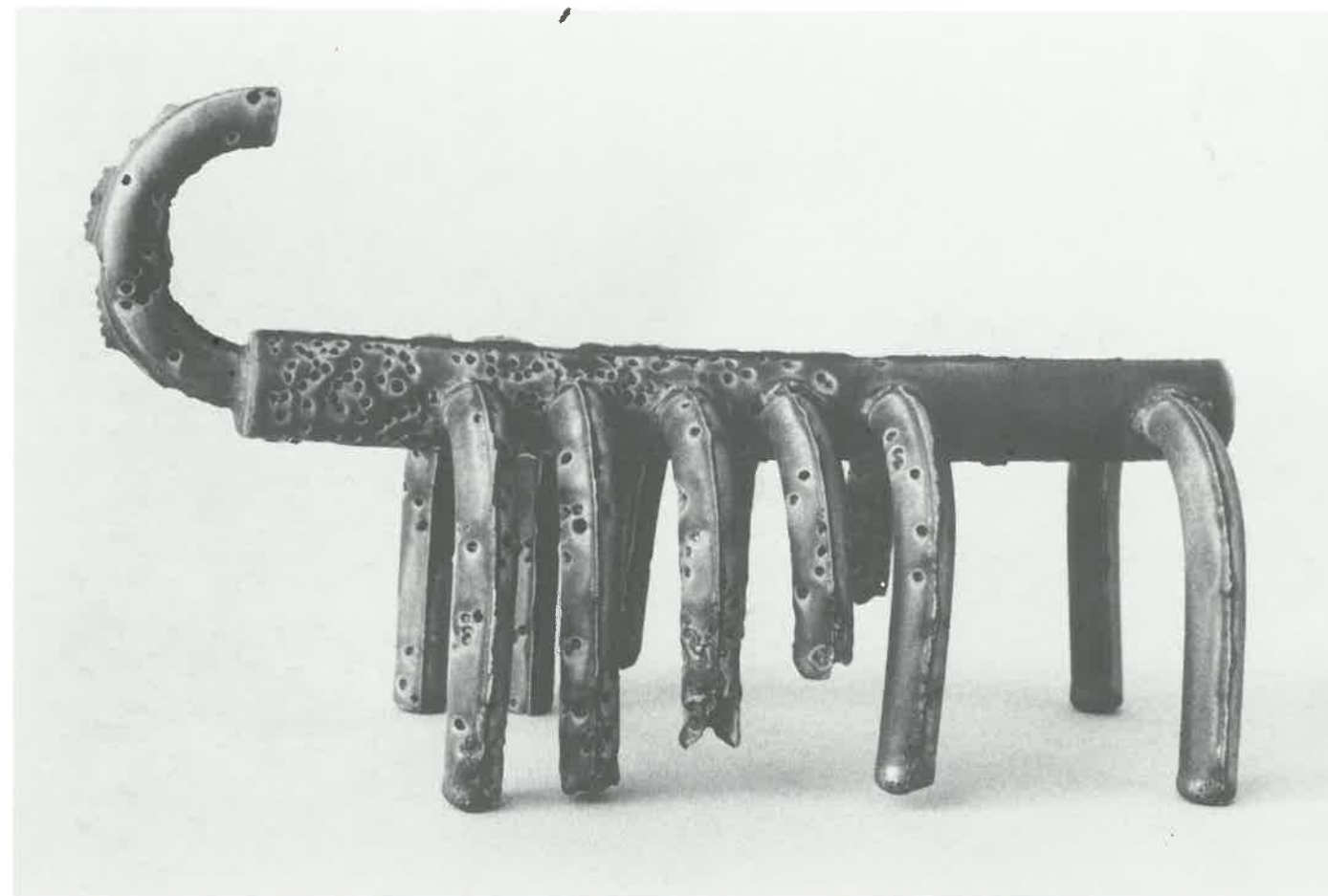


86企画-5 奥田 実 クレイ・ワーク展 9月5日(金) - 9月28日(日) (月曜休廊)

GALLERY TAKUMI



銅青釉の器 1986 H18, W32, D12cm

「ヤチムンを超えて」

翁長 直樹

初めて奥田実の作品を物産センター画廊で観たとき、今までの焼物のイメージとは、まるで違った、軽やかで、いたずらっ子の作品と出会ったような新鮮な驚きを感じた。かろうじて器物の形体をとどめた本体から触覚、あるいは器官めいたものが、いくつもニョキニョキととび出し、軽妙な笑可しさが画廊内に漂っていた。それでいて、全体の気品を落すことなく、キッチンと作品のギリギリのあやういところで止って、スリルを感じた。

土の焼物に対する我々のイメージは、素材の性質上、風土に取り込まれて、なかなかそれから飛翔できないでいる。沖縄における状況は、その良い例である。造形的興味で、神話や伝統から離れて造られても良さそうなも



のであるが、新しい試みの作品には出会うことがない。沖縄における焼物のイメージを挙げてみるなら、暖かい、親しみのある、素朴な、という言葉が出てくるが、案外我々は、そのような言葉を、作品の中に見付けて満足してしまっているのではなかろうか。

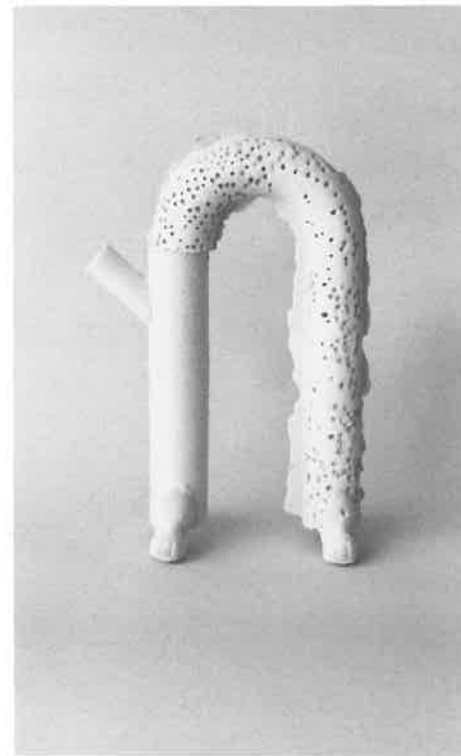
奥田実はい成の焼物からのイメージの転換を図ろうとする。重力に逆らうこと、動きを出すこと、あるいは展示空間への配慮すること等。奥田実は器物とオブジェに異ったコンセプトを示す。「クレイワーク展」は焼物によるオブジェ展であるが、湿った土のしみ込んだスポンジの真中を押し込んで、ボルトを通し、そのまま焼き上げる。それを十数個画廊の天井からつるす展示形式をとる。フワリと浮いたスポンジのようなオブジェは、かなり我々のイメージを喚起してくれるものと思う。

奥田実は京都に生れ、京都芸大で、陶によるオブジェの草分け的存在、故八木一夫に学んだ。その後ドミニカで3年間陶芸の指導に赴き、そこで全く違う風土と、時間の流れを経験した。そのことが彼の陶芸作品に少なからぬ影響を与えていると思われる。

■奥田 実 プロフィール

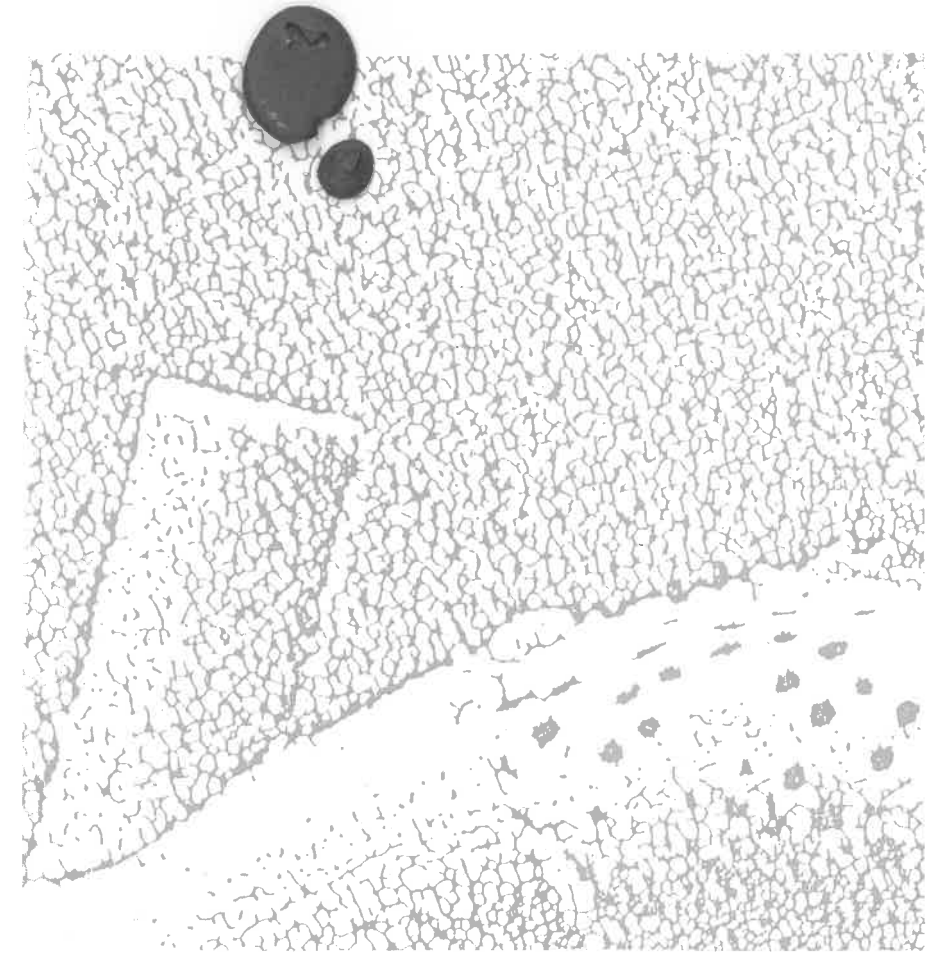
- 1948 京都市に生れる。
- 1976 京都市立芸術大学陶磁器科卒業。
- 1977・78 「土橋画廊」(京都市)に於て二人展。
- 1981 国際協力事業団派遣専門家として、ドミニカ共和国に渡る。国立民芸センターに於て陶芸及び工芸デザインを指導。
- 1983・84 「カサス・レアーレス画廊」「国立人類博物館」(サント・ドミンゴ市)に於て、妻 有美と二人展。
- 1984 帰国。
- 1986 「沖縄物産センター画廊」(那覇市)に於て個展。

京都、ドミニカ、沖縄、全く違う風土の中で、生活し、制作する奥田実の外界との距離のとり方はいかなるものか、興味のあるところである。



白風釉獣足の器 1986 H21.5, W14.5, D8cm

琉球大学教育学部講師。



186